子育て対人環境認知と夫婦ペアレンティング調整, 心理的適応の関連¹

就学前の乳幼児を育てている親を対象とした検討

○西村太志¹・古谷嘉一郎²・相馬敏彦³・長沼貴美⁴(¹ 広島国際大学心理学部・² 北海学園大学経営学部・³ 広島大学大学院マネジメント専攻・⁴ 創価大学看護学部)

キーワード: 夫婦ペアレンティング調整・子育て対人環境認知・心理的適応

The relationship between the cognition of information and interpersonal environment for child-rearing, coparental regulation behavior and mental adaptation.

Takashi NISHIMURA¹, Kaichiro FURUTANI², Toshihiko SOMA³ and Takami Naganuma⁴(¹ Hiroshima International Univ., ² Hokkai Gakuen Univ., ³ Hiroshima Univ. ⁴ Soka Univ.)

Key Words: coparental regulation behavior, child-rearing, mental adaptation of caregivers

【問題】子育て中の人々が周囲の対人環境から獲得する情報の種類や内容によって、自身の心理的適応に影響を及ぼすことが示されている。西村ら (2012) は、保有する対人関係資源から受ける様々な働きかけを「重荷」と感じることが心理的不適応につながることを示した。一方古谷ら (2012) は、保有する対人関係資源から受ける様々な働きかけを「助け」と感じることは、育児に対する展望をポジティブにし、その結果心理的適応に肯定的な影響をもたらすことを示した。加えて西村ら (2013) は、周囲の対人環境を「助け」とみなすことは、子育てによって自分の時間を制限されているという認知を高め、結果として心理的適応にネガティブな影響をもたらすことを示唆している。養育者が子育て環境を「助け」と認知することは、支えられていると感じると同時に、周囲の人々からの過剰な期待とも捉える可能性がある。そのため、周囲からの期待に応えようとするのが、子育てによる制約感を高め、結果として心理的適応にネガティブな影響をもたらしている可能性が考えられる。

このように、乳幼児を養育している人の心理的適応を検討する際には、周囲からのサポートや情報獲得の側面も考慮すべきである。さらに、Bronfenbrenner(1979)の生態学的モデルで示されているように、個人を取り巻く社会を複数のサブシステムで捉え、それらの影響も考慮すべきである。そこで、個人を取り巻く対人的影響を、夫婦間行動と、より広範な子育てに関する周囲からのサポートや情報の獲得の双方を考慮し検討する。

夫婦間行動について、本研究では夫婦ペアレンティング調整を扱う。加藤ら (2014) は、父親の子育て関与に関する母親の調整行動について、父親の子育て関与に対する母親の行動を抑制行動と促進行動という二側面から整理しており、本研究でもこの枠組みを用いる。先行研究での議論を元に、本研究では夫婦ペアレンティング調整を子育て対人環境認知と心理的適応を仲介する要因として扱うこととする。

【方法】調査対象者・時期: (株)クロスマーケティング保有モニターのうち、就学前の子どものみを養育し、配偶者と同居している 644 名 (男 319 名, 女 325 名)。平均年齢 36.8 歳 (22~57 歳)。2014 年 10 月に web 調査を実施した。使用尺度 (本報告の分析対象のみ): 子育て対人環境認知尺度: 西村ら (2012) で使用した、対象者の周囲を取り巻く人物や電子メディアから得られるサポートの認知の差異を測定する尺度を改良した。子育てについてのサポートや情報の獲得の頻度を「意見」「手助け」「励まし」「愚痴」「電子メディアからの情報」「新聞雑誌からの情報」「テレビからの情報」について 5 件法 (0~4) で尋ねた。さらに、頻度が全くなかったとした項目以外について、その獲得を「助け」とみなしたか「重荷」とみなしたかを各々 5 件法 (1~5) で測定した。さらに、尺度得点を算出する際には頻度と認知の対応項目を掛けあわせ、最終的に 14 項目、得点範囲は 0 から 20 とした。夫婦ペアレンティング調整尺度: 加藤ら (2014) が用いた促進 (9), 批

判 (7) の計 16 項目を一部修正して用いた。5 件法で測定し高得点ほど母親の調整行動が多いと認知している。項目内容の意味は同一だが、男女で教示と表現主体 (女性是自己, 男性は妻) が異なるため、分析は各々行った。心理的不適応尺度: 古川ら (2002) の K6 (6 項目, 5 件法) を用いた。高得点ほど心理的適応状態が悪いことを意味する。

【結果と考察】解析には、清水ら (2006) の HAD を用いた。子育て対人環境認知 (因子分析の結果「重荷」「直接助け」「間接助け」の三因子抽出) と夫婦ペアレンティング調整 (「批判」と「促進」の二因子抽出) が心理的適応に与える影響について、構造方程式モデリングによるパス解析を行った。男性の結果を図 1, 女性の結果を図 2 に示した。なお、図中の変数の平均値は、批判行動以外すべて男性より女性のほうが高い値を示した ($ts > 2.94$)。

その結果、男女とも重荷認知と批判行動のパス、批判行動から心理的不適応のパス、重荷から心理的不適応への直接のパスいずれも有意であった。周囲の対人環境から受けるサポートや情報を重荷だと認知することは、直接心理的不適応を規定することが示された。加えて重荷認知は夫婦ペアレンティング調整における妻からの夫への批判行動の認知を男女ともに増やし、そのことが不適応を助長することも示された。この結果は、子育て中の人々の心理的適応を考慮する際には、対人環境の否定的なとらえ方と夫婦間の調整行動における批判行動という、二つのサブシステムを考慮する必要があることを示唆するものである。

加えて、周囲の対人環境から直接的なサポートを受けているとみなしていると、直接的に心理的不健康度を低下させることと、夫婦ペアレンティング調整の促進行動を高めることが男女ともに示された。獲得している情報やサポートの有効性を高く認知することは、個人をとりまくサブシステムのより中心にある夫婦間での子育ての調整行動にも肯定的な影響を及ぼすことが示された。

さらに、男女で異なる影響過程も示された。女性では、周囲の対人環境を「重荷」とみなすことが夫への促進行動を増加させ、「直接的な助け」とみなすことが夫への批判行動を増加させていた。男性ではそのような影響は認められなかった。女性においては、周囲の子育て対人環境のとらえ方が、夫婦間の子育て調整行動にも複合的に影響することが示唆される。

今後夫婦ペアデーターなどを収集し、ペアレンティング調整行動の認知のズレなどを考慮した検討も必要である。

¹ 本研究は、第一発表者のゼミ生の斉藤由佳・大峰陽介・熊井奈央各氏の卒業論文データを再構成したものである。本研究は科研費および広島国際大学特別研究助成制度の支援を受けた。